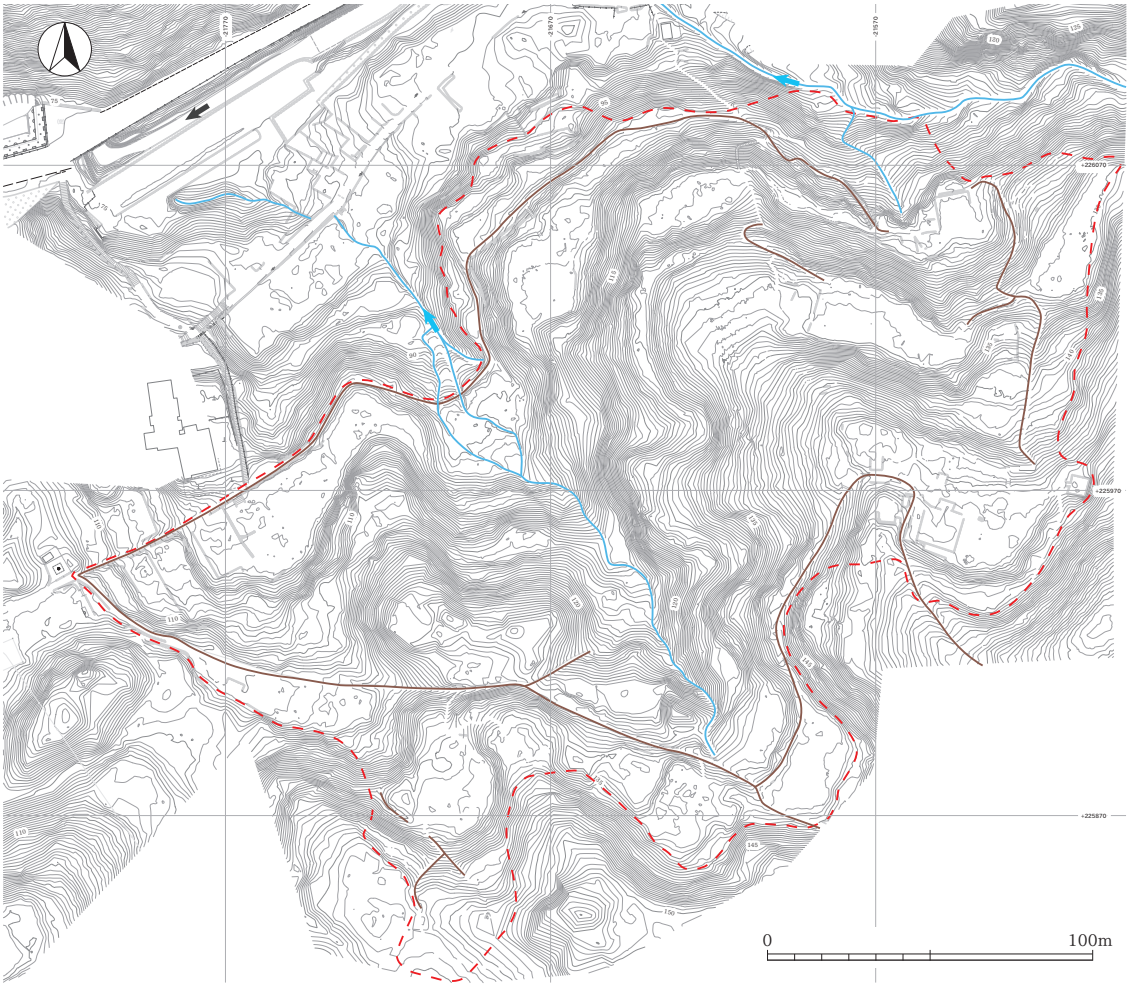
第Ⅲ章　調査の成果

1　調査方法と記述について

上寺町地区は、これまで寺院跡のおおまかな位置や一部の石造物の調査が行われたのみで［相川町史編纂委員会 1973、斎藤ほか 2003、佐藤ほか 2004］、その全容は明らかにされてこなかった。しかし、古記録や地形図等から、寺域や墓地といった遺構群が広範囲に分布していると想定されることから、記録類の検討や前回の調査担当者及び地元住民への聞き取りをもとに、上寺町地区で唯一残る浄土真宗万照寺の南東斜面約 50,000m^2 を対象に、寺院が集中していた寺町の範囲や遺構の残存状況の把握を目的とした分布調査を実施した。調査にあたっては、以下のとおり調査対象・調査基準を設けた。

1）調 査 対 象

平成 17 ～ 18 年度に実施した、上寺町地区の北に隣接する上相川地区の確認調査では、鉱山集落に関連するテラス群及び、それに付随する石垣・石段・道・水路・窪地等の遺構群が多数検出されている［宇



第 3-1-1 図　分布調査範囲

佐美ほか2008]。今回の調査でも、寺院や墓地が所在したテラスや、その補強のための石垣、寺同士を結ぶ道や石段等の検出が予想されることから、上相川地区確認調査報告書で記述のあったテラス、石垣・石段、道跡等を基本とし、その他分布調査の段階で確認された、寺院に関連すると想定される井戸・池・水路等も調査対象とした。

遺物については、分布調査で表採した遺物のうち、各寺院の存続年代やテラスの機能を示すものを中心に抽出した。

2）調 査 基 準

A　テラス・墓域

現地にて、人為的に斜面を造成して形成されたと判断される平坦面をテラスとした。また、調査区内において、急斜面や災害等による崩落箇所、著しい樹木の繁茂等により立ち入りが困難な場所については、地形図上から認められる平坦面を推定テラスとした。なお、墓地については、テラスに墓石が集中している場合はテラスに含めるが、テラス以外の緩斜面に墓石が集中しているケースも見受けられることから、別途「墓域」として取り扱うこととした。

B　石垣・石段・石列

テラスの補強に用いられる石垣や、寺院の参道に設けられた石段、建物の基壇に付随する石列など、現況で確認できる石製土木構造物を対象とした。

C　道

絵図や地形図等の資料を参考に、寺院と寺院を結ぶ道を現地形から判断した。また、調査の過程で認められたテラス同士を結ぶ道についても、調査対象とした。

D　井　　戸

現況で確認できる人為的な深掘の痕跡のうち、内面に滞留水を含むもの及び、円形または方形の井戸枠を伴うものを井戸跡とした。

E　池 ・ 水 路

現況で確認できる窪地や溝状の地形のうち、テラス内での機能や位置関係、石組などの付帯構造物の有無などから判断した。

F　石　造　物

墓石、石灯篭、石鉢、寺碑などの寺院関連の石造物のうち、地表面で顕著に確認できるものを中心に抽出した。

3）調 査 方 法

調査にあたっては、平成 12 ～ 13 年に実施した寺社調査結果［斎藤ほか 2003］及び 1/2,500 地形図をもとに、寺院跡と想定されるテラスを中心に草木の伐採を行い、地表面での遺構の有無を確認した。

その結果、絵図資料にみられる 8 ヵ寺のうち（第 2-4-6 図、第 2-4-7 図）、現在も続く万照寺以外の 7 ヵ寺の範囲や位置関係がほぼ明らかとなったことから、次節以降、検出された遺構・遺物については、まず各寺院ごとに記述し、次いで寺院以外で確認された遺構・遺物について述べることとする。

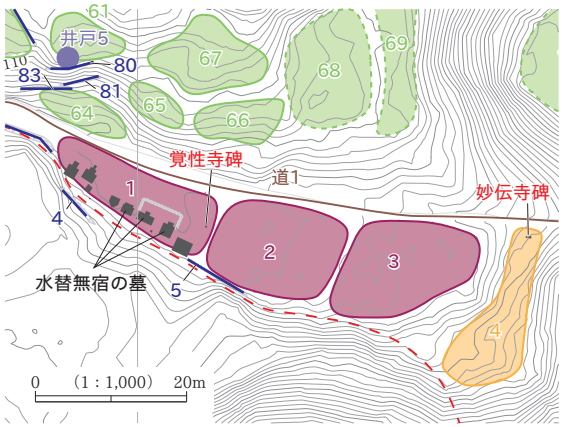
遺構･遺物の位置については、佐渡市が作成した 1/500 地形図に表示し、グリッドの設定にあたっては、調査区内に任意に 100m の方眼を組み、北西を基点として東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベット（大文字）とし、この組み合わせにより表示した。また、関連する絵図や文献資料類は、史料ナンバーを付して巻末に一括して掲載し、本文中では史料ナンバーでの引用とした。

2　遺　　構

1）覚性寺跡（日蓮宗）

調査区の南西部、●グリッド東端部から●グリッド西部に位置し、3 基のテラス（テラス 1 ～ 3）を確認した。

テラス 1 では、江戸中期～末期にかけて佐渡鉱山の坑道内で湧水処理に従事した江戸無宿の墓 3 基［佐藤ほか 2004］のほか、後世に築かれた無宿の供養塔が複数所在する。また、テラス 2 との境界付近には、昭和 56 年（1981）10 月に当時の相川町日蓮宗護法会が建てた「妙法山覚性寺蹟」の寺碑がある。



第 3-2-1 図　覚性寺遺構分布図

テラス 2・3 では杉が植林されており、寺院の痕跡を示す明確な遺構は存在しないが、テラス 2 において、テラス 1 と道 1 との境界部分に高さ 10cm 程の小規模な土塁状の高まりが認められた。

2）妙伝寺跡（日蓮宗）

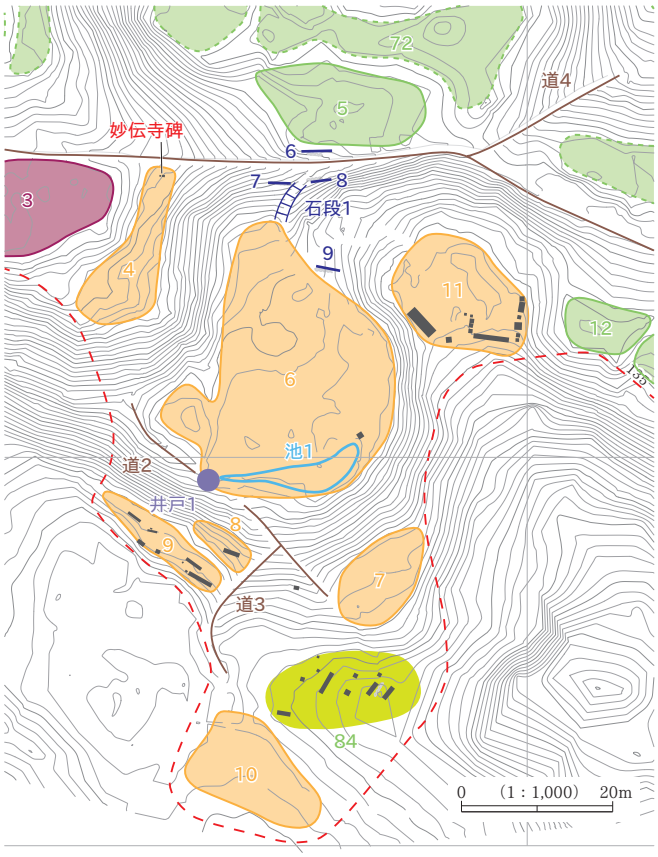
調査区の南部、●グリッド南東部から●グリッド北東部に位置し、7 基のテラス（テラス 4・6 ～ 11）と 1 基の墓地群（墓域 84）を検出した。

テラス 4 の北端には、明和 7 年（1770）の銘を持つ妙伝寺碑と、昭和 56 年の「法榮山妙傳寺旧蹟」碑が 2 基並列して存在する。

テラス 6 の南部では、池跡と想定される最大幅約 8m、長さ約 15m 程の溝状の落ち込みと（池 1）、内部は水が溜まり深度は不明であるが、直径約 1m の割石で組まれた井戸（井戸 1）を検出した。また、北端部には、道 1 からの入口となる石段や石垣があり（石段 1、石垣 7・8）、石段の先には石製の手水鉢が配置され、池 1 の周囲には石灯篭の竿や土台部分と想定される石造物が散乱していた。妙伝寺の中で最大の面積を持つテラスであることからも、妙伝寺の境内地であった可能性が高い。なお、井戸 1 の西には、テラス 4 に向う幅約 1m 程の道状の切り通しとなっており、その先は斜面の崩落により原地形はとどめていないものの、テラス 4 に明和 7 年の妙伝寺碑が存在することから、参道であるテラス 4 を通って境内であるテラス 6 へ至るルートがあった可能性が指摘できる。

テラス 6 から南においては、テラス 7 ～ 10 へ続く道 3 があり、テラス 8・9 及びテラス 10 の北に隣接する斜面（墓域 84）には、板石型、角柱型の墓石が多数残存していた。このうちテラス 9 には、今回の調査区では最古級の元禄 7 年（1694）の銘を持つ墓石が、墓域 84 には小池氏・松田氏・小室氏の銘を持つ墓石が確認された。

テラス 11 にも、コの字状に配置される墓石が確認されており、林氏・張原氏の銘がみえる。



第 3-2-2 図　妙伝寺遺構分布図

3）法久寺跡（日蓮宗）

調査区の南東部、●・●・●・●の 4 グリッドにまたがって位置し、9 基のテラス（テラス 18 ～ 26）と 2 基の墓域（墓域 85・86）を確認した。

テラス 18 の南西端には、宝暦 13 年（1763）［佐藤ほか 2004］と、昭和 56 年の法久寺碑が並列しており、法久寺への入口を示していると考えられる。

テラス 18 から 19 へ至る道 1 の道中には、享保 8 年（1723）の相川で最古の心中墓がある（墓域 85）［佐藤ほか 2004］。

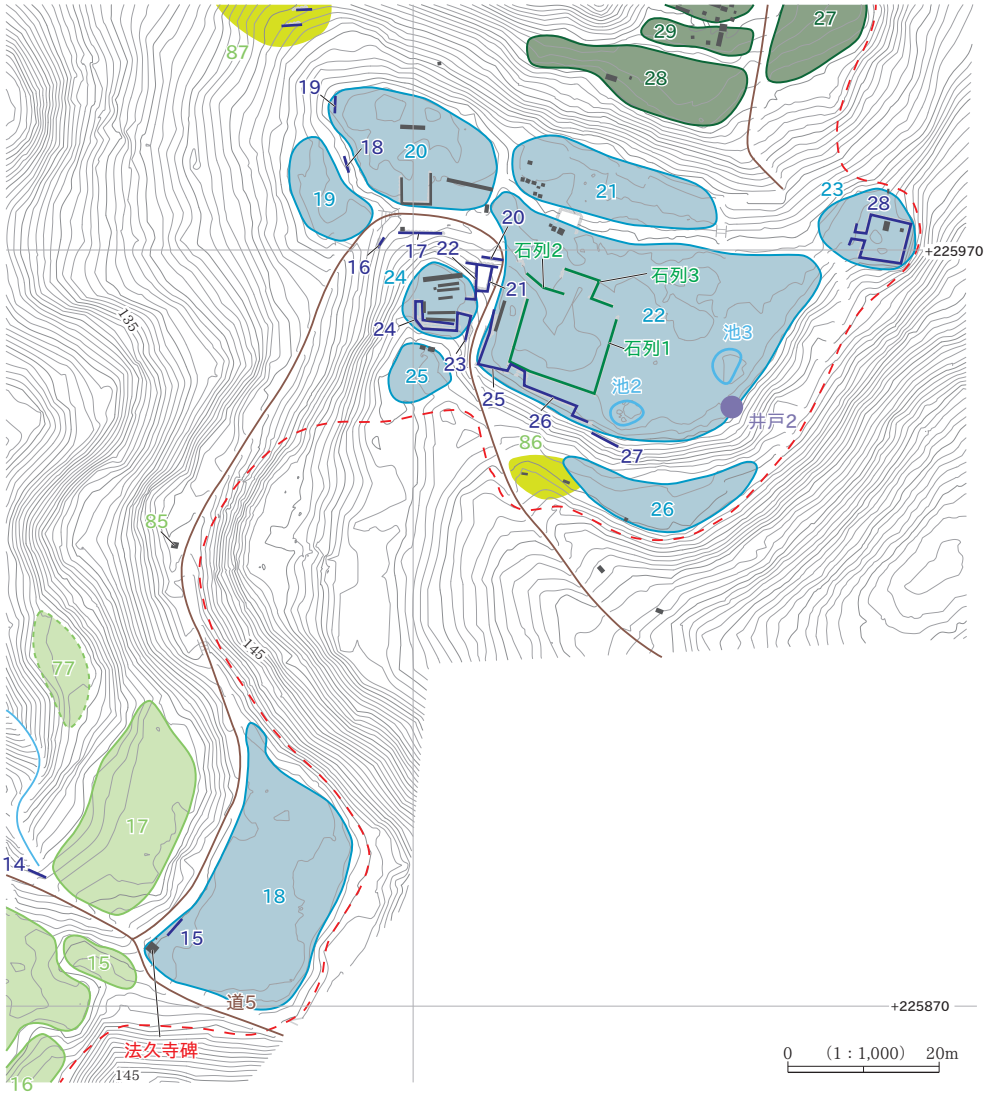
テラス 20 のほぼ中央部と南東部には、歴代住職の墓地と想定される直線状に配置された 2 群の墓石群がある。南部には、切石で組まれた 1 辺約 4m の方形の土台を持つ墓地が検出されたが、土台石が乱雑に積まれており、墓石本体も既に移転されていた。

テラス 21 には、中村氏の銘を持つ墓石と、開祖と中興の僧侶名を持つ無縫塔が存在する。

テラス 22 の西部では、切石を用いて 1 辺 12m 程のコの字状に組まれた石列をはじめとする複数の石列を検出したが（石列 1 ～ 3）、倒竹が激しく、建物に関する遺構かどうかの確認はできなかった。このほか、南西端には長方形の切石を使用した石垣がみられ、南東部には切石で組まれた 1 辺約 1m の方形の井戸（井戸 2）と、池状の窪地 2 基（池 2・3）があり、法久寺で最も広いテラスであることからも、法久寺の境内地であった可能性が高い。

テラス 23 は、1 辺 5 ～ 6m の切石の石垣で四方を囲まれており（石垣 28）、内部は土砂に埋もれた墓石の破片が散乱しているが、「七代目岩崎茂右衛門」の銘を持つ墓石塔身がみられた。

テラス 24 は、1 辺約 10m の方形状のテラスであり、切石の石垣で周囲を囲まれている（石垣 20 ～ 24）。内部は整然と墓石が並べられており、江戸初期に小判師として来島し、その後地役人として奉行所に勤務した佐藤氏（明治以降は松栄氏へ改姓）一族の墓地である［相川町史編纂委員会 1973、佐藤ほか 2004］。



第 3-2-3 図　法久寺遺構分布図

テラス 25 には、2 基の墓石の土台が残っている。

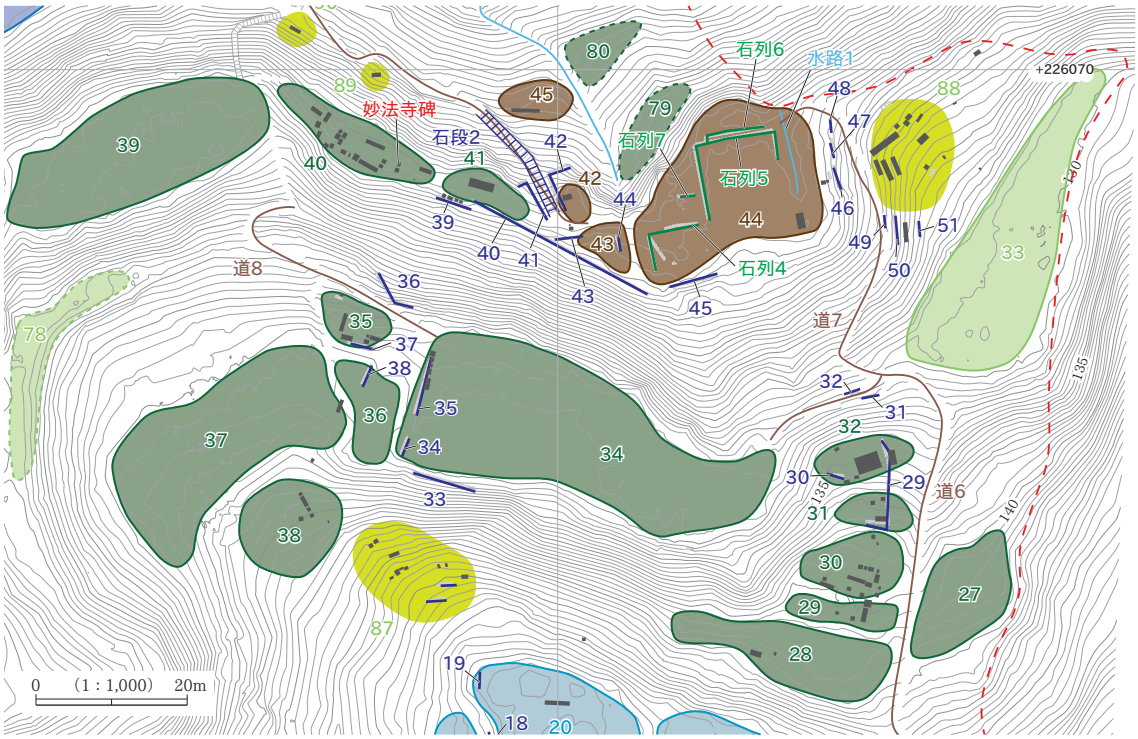
テラス 25 の南東には、2 群の墓地があり（墓域 86）、東側の墓石には「川野氏」の記銘がある。

4）妙法寺跡（日蓮宗）

調査区の東部、●グリッドから●グリッドにわたって所在し、14 基のテラス（テラス 27 ～ 32、34 ～ 41）と 1 基の墓域（墓域 87）を検出した。

テラス 28 ～ 32 には墓石が多数存在し、妙法寺の墓地のひとつと考えられる。テラス 28 には五輪塔 1 基、笠塔婆 1 基が残っている。テラス 29・30 にはコの字状に配された墓地があり、テラス 29 は台石のみであるが、テラス 30 では歴代住職と想定される「十世日榮聖人・十一世日穡聖人」と「持田氏」の記銘がある墓石がみられた。テラス 31 では 1 基の笠塔婆と 4 基の台座、テラス 32 では 1 基の五輪塔と 2 基の墓石のほか、五輪塔の部材などが散乱していた。

テラス 34・35・38 及び墓域 87 一体も墓石の分布が見られる。テラス 34 の大部分は杉が植林されているが、西端部に南北方向に一列に配される「内田氏」一族の墓地が確認された。また、テラス 35 には「伊



第 3-2-4 図　妙法寺遺構分布図

沢氏」、テラス 38 には「増山氏」の墓地が存在する。

テラス 40 から 41 にかけても墓石が集中している。テラス 40 には、歴代住職に関係すると考えられる「十二世」や「邑上氏」「本間氏」の記銘がある墓石などが所在する。テラス 41 には、北側に墓石の台石と、昭和 56 年（1981）建立の「一乗山妙法寺旧蹟」の寺碑がある。

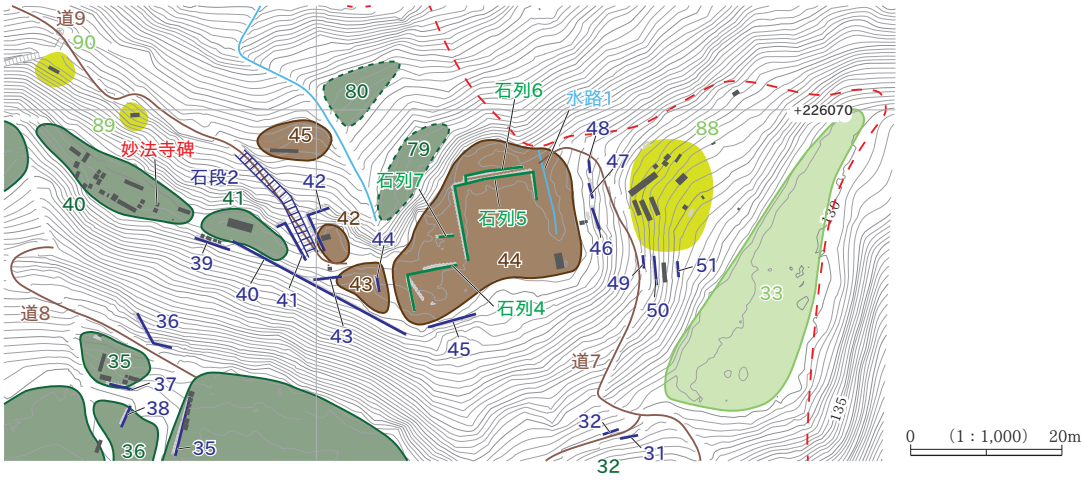
このほか、法久寺と妙法寺を結ぶ道 6、妙法寺と後述する興禅寺を結ぶ道 7、法久寺内のテラス 34 と 39 ～ 41 をつなぐ道 8（テラス 35 北西部で痕跡が途切れる）の所在も確認された。

5）興禅寺跡（臨済宗）

調査区の北東部、●グリッド北東端から●グリッド北部にかけて所在し、4 基のテラス（テラス 42 ～ 45）と 1 基の墓域（墓域 88）を検出した。

テラス 42 には、木柱とポリカ波板製屋根の小屋が所在したが、朽壊していたことから、小屋材を取り除いたところ、長方形の切石で前面と左側面を囲まれた平坦面に、石製の 3 体の首無地蔵と花立や土台などが確認された。

テラス 44 には、切石で配された 1 辺約 10m のコの字状の石列（石列 5）と、1 辺約 5m の L 字状の石列（石列 4）があり、それぞれ内部は周囲よりもわずかに高く整地されていることから、興禅寺に関する建物基壇の可能性が高い（基壇 1・2）。石列 5 の北側前面にはさらに一列の石列があり（石列 6）、石列 5 と並行して 2 段の基壇となっている。さらに石列 5 の上面には、興禅寺の墓石の一部と思われる切石や破片が 2 ～ 3 段の高さに積み重ねられており、寺院の廃絶後に何らかの理由で人為的な措置が加えられたと考えられる。それに関連して、石列 5 の北側周辺には、興禅寺檀家と推測される「日向氏」「西村氏」の銘がある墓石が埋没していた。なお、石列 5 の東には、テラス 44 の南東端斜面からの湧水を北の桐ノ木沢へ流すための水路がみられる（水路 1）。



第 3-2-5 図　興禅寺・源昌寺遺構分布図

テラス 44 の東には、興禅寺と妙法寺を結ぶ道 7 があり、その東側斜面には興禅寺墓地が所在する（墓域 88）。切石で組まれた台座と、それに付随する墓石が 2 ～ 3 基ほど残っているが、ほとんどが倒壊しており、墓石の部位や破片が散在している状況であった。

テラス 45 も興禅寺墓地と想定され、7 基の墓石が東西方向に一列に配置されている。

テラス 42 の北西には、興禅寺と後述する西光寺を結ぶ道 9 があり、興禅寺側の始点は急斜面となっていることから、切石を用いた幅約 1.5m、長さ約 17m の石段 2 と、両側斜面の崩落防止のための石垣 41・42 が築かれている。

6）源昌寺跡（浄土宗）

調査区の北東部、●グリッド南西端から●グリッド北西端にかけて所在すると想定されるが［斎藤ほか 2003］、平成 19 年（2007）に実施した補足調査カードには「川の氾濫で地形が変わり境内を特定できない。僅かに石垣の一部と山裾に石祠が残る」とあり、今回の調査でも斜面の崩落が激しく、現地を確認することはできなかった。

江戸時代の記録では、境内地は 4 畝 23 歩（≒ 471.9m^2）とあり（史●・●・●）、それほど広い面積ではないと想定されることから、1/500 地形図上で確認できる興禅寺境内（テラス 44）の北に隣接するテラス状の平坦面（推定テラス 79・80）付近を源昌寺跡とした。

7）西光寺跡（浄土宗）

調査区の北西部、●グリッド南西部から●グリッド北東部にかけて位置しており、2 基のテラスを確認した（テラス 47・48）。

テラス 48 の北部には、道 9 からの入口があり、2 基の石段が存在する（石段 3・4）。石段 4 の西には、笠塔婆（三界万霊塔）1 基と「當山廿三世」の銘がある無縫塔 1 基が残る。東部には、L 字状に配された「山本氏」の墓地と、コの字状に配された「前川氏」の墓地がある。南部には、1 辺約 15m の正方形の高まりがあり、西光寺に関する建物の基壇の可能性がある（基壇 3）。基壇 1 の北西部には、切石の集積が見られ、首無石仏 1 体が残存する。

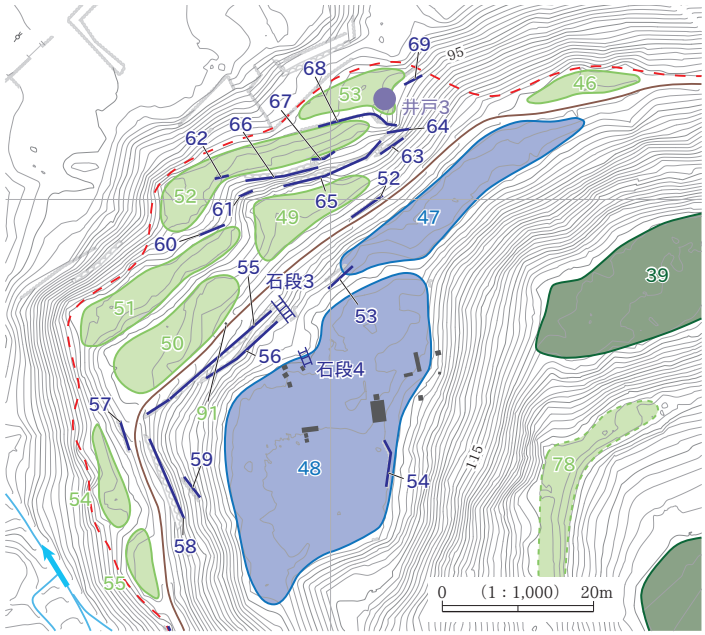
テラス 48 の北西、道 9 との間には上下 2 段の石垣があり（石垣 55・56）、上段は高さ約 1m、長さ約

15m、下段は高さ約 1.5m、長さ約 23m を測る。未加工の切石が乱雑に積まれており、石材の中には使用済の石磨や叩石の転用品もみられる。

8）その他の遺構

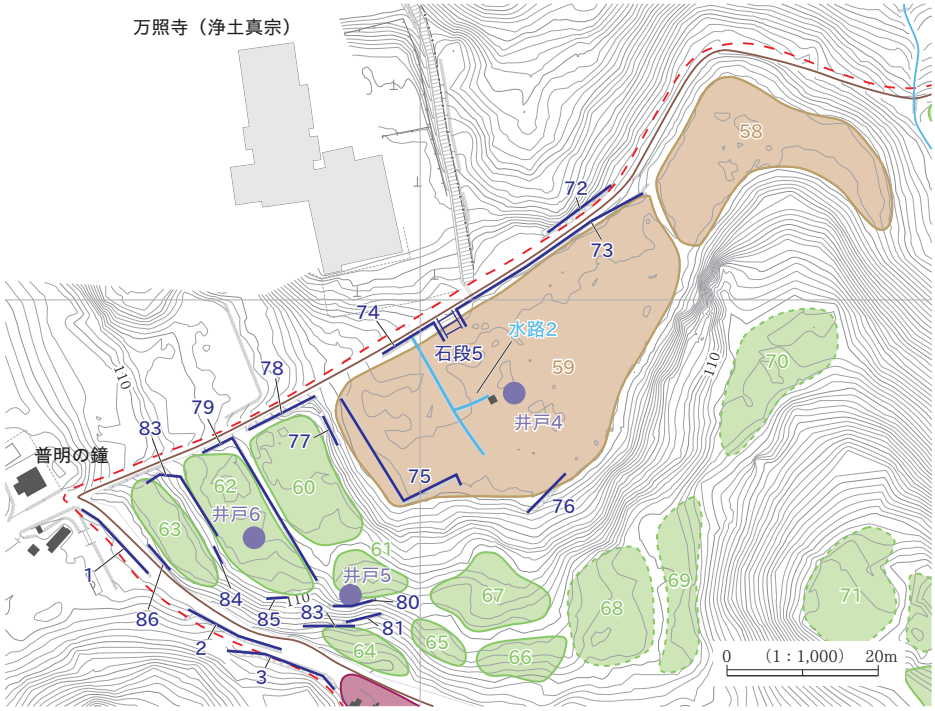
A　大塚部屋跡

調査区の西部、●グリッド南西部から●グリッド北東部に位置するテラス 59 は、明治から昭和初期にかけての鉱山労働者の寄宿舎のひとつである「大塚部屋」が所在したと伝わる場所である。明治 26 年(1893)、鉱山にほど近い銀山町から次助町に移転し、昭和 10 年（1935）頃まで存続していたという［相川町史変遷委員会 2002］。



第 3-2-6 図　西光寺遺構分布図

現況は、テラス一面に杉が植林されているが、テラス北部の道 9 からの入口部分は、幅約 3m、長さ約 2.5m、高さ約 2m の石段となっており（石段 5）、その両側は、モルタルの目地で補強した間知石積みの石垣がみられる（石垣 73・74）。テラスのほぼ中央部には、切石で四方を囲まれた建物の基礎があり、モルタル製の外壁や煉瓦の破片、石製流し台などが散乱し、切石で方形に組まれた井戸枠を持つ井戸跡も検出された（井戸 4）。また、その西側には、未加工の切石で壁面を組んだ排水路がＴ字状に分布していた（水路 2）。



第 3-2-7 図　大塚部屋遺構分布図

以上の点から、本テラスが大塚部屋の中心であると考えられる。なお、文政 9 年（1826）の町墨引では、テラス 59 一帯は佐渡奉行所役人である黒田氏と滝沢氏の御拝領地となっており（第●図）、江戸後期の時点でそれなりに広い屋敷地となっていた。明治 26 年の時点で、既存の屋敷地を転用することで、大規模な土地造成の必要がなかったことが、大塚部屋移転の要因のひとつであったと想定される。

B　テラス群

テラス 11 ～ 16

妙伝寺の東、道 1 に並行して大小 6 基のテラスが並ぶ。

このうちテラス 15 の北、道 1 内に鉱山用の上臈の破片が残存しており、付近に鉱石の粉成に関連する施設が存在していたことをうかがわせる。

テラス 49 ～ 53

西光寺の北の下り斜面に、北東－南西方向に長いテラス群が分布する。

テラス間の斜面には、未加工の切石で積まれた大小様々な石垣がみられ（石垣 60 ～ 68）、テラス 53 の南端には、土砂で埋没しているものの井戸状の落ち込みが確認できることから（井戸 3）、鉱山関係者の住居が存在していた可能性がある。

テラス 60 ～ 63

大塚部屋跡の南西の登り斜面に展開するテラス群で、テラスを補強する石垣群や（石垣 78 ～ 86）、石製の井戸枠を伴う円形の井戸跡を検出した（井戸 4・5）。

文政 9 年（1826）の町墨引では、大吹板取や山鍛冶といった鉱山労働者の宅地や、佐渡奉行所役人山田氏の御拝領地、明屋敷となっており（第●図）、それらに関連する遺構群と考えられる。

C　道

道 1

次助町から覚性寺、妙伝寺、法久寺を通って上相川方面へ至る旧道である。妙伝寺墓地のテラス 11 の北付近で、さらに北の沢へ下る道 4 と、法久寺碑があるテラス 18 南西で金北山へ続く道 5 が分岐する。

元禄 9 年（1696）の第 2-4-4 図では妙円寺（妙伝寺移転前）、文政 6 年～天保 9 年（1823 ～ 1838）の第 2-4-7 図では覚性寺と妙伝寺の前を通って法久寺に至る道が描かれており、道 1 はこの旧道に該当するものと考えられる。

道 4

妙伝寺の北付近から沢へ下る旧道である。道 1 からの分岐点から約 20m 地点で、樹木の繁茂が著しくなり、先へ続く明確な道の痕跡は確認できなかった。

第 2-4-4 図では妙円寺、延享 5 年～宝暦 7 年（1748 ～ 1757）の第 2-4-6 図では妙伝寺の前から妙法寺へ至る道が記されており、道 4 がこれにあたると想定される。しかし、第 2-4-7 図の段階では記載されなくなり、江戸後期以降道の使用頻度が下がったことが、道の痕跡が不明瞭である要因と考えられる。

道 5

テラス 18 の南西で道 1 と分岐して金北山へ続く道である。

第 2-4-7 図には、法久寺の西で「金北山道」と書かれた道があり、この道に該当すると考えられる。

道 6

法久寺と妙法寺をつなぐ道で、テラス 23 の北西からテラス 34 の北東にかけて残存する。テラス 33 の南西で、興禅寺のテラス 44 へ向う道 7 が分岐する。

第 2-4-4 図と第 2-4-6 図に、法久寺の北から妙法寺の東を通って妙法寺へ至る道が記載されており、この道に該当するものと考えられる。

その一方で、第 2-4-5 図、第 2-4-7 図では、法久寺の北西から妙法寺の西を通って妙法寺とその先の興禅寺・源昌寺へ至る道が記されているが、今回の調査では明確な痕跡は確認できなかった。

道 8

妙法寺のテラス 34 から興禅寺方面へ至る道であるが、テラス 39 の南西で消失している。

第 2-4-4 図～第 2-4-7 図にみえる妙法寺と興禅寺を結ぶ道が道 8 と想定される。なお、第 2-4-4- 図にのみ、興禅寺の南を通って上相川に至る道が描かれているが、今回の調査では未確認である。

道 9

興禅寺から源昌寺・西光寺を通って次助町へつながる道で、石段 2 の北西で斜面の崩落により一部欠損しているが、ほぼ全体にわたって良好に遺存している。

第 2-4-4- 図では、源昌寺から庄右衛門町を経由して西光寺へ続いているが、第 2-4-5 図～第 2-4-8 図では 1 本の道として描かれている。

なお、第 2-4-5 図～第 2-4-8 図にみえる源昌寺から上相川へ至る道と、第 2-4-6 図・第 2-4-7 図にみえる西光寺と庄右衛門町を結ぶ直線状の道は、今回の調査では検出されなかった。

D 墓　　域

墓域 89

●グリッド北東部、道 9 の西斜面に築かれた佐渡奉行所地役人「倉本氏」の墓碑である。

右側面には、5 代目の藤右衛門が、宝暦 3 年（1753）8 月に奥州（現福島県）半田銀山の役人に命じられ、それ以降同国の桑折に居住したこと、左側面には、天保 13 年（1842）8 月に、半田銀山役人の倉本藤太郎賢俊という人物がこの墓碑を建てたことが記されている。

墓域 90

●グリッド南東部、道 9 の西斜面に 2 基の墓石が並んで配されている。左側の墓石は欠損していて文字は判読できないが、右側の墓石は「能勢氏之墓」の銘がみえる。

「諸役人先祖書」によると、元和元年（1615）から佐渡奉行に仕え、延享 3 年（1746）時点で 5 代目となる能勢十右衛門という人物がいたとされるが［新潟県 1981］、同一族の墓かどうかは不明である。

墓域 91

●グリッド北東部、道 9 の北側に位置する延享元年（1744）の墓石で、正面に「南無阿弥陀仏」の銘、背面に戒名が刻まれている。